

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第75号

● Contents ●

論点：沿岸共同体のレジリアンス：日本を事例とした発展的研究	デレーニ・アリーン	1
Topic: Resilience in Coastal Communities: evolving research in Japan	(ALYNE E. Delaney)	1
東北アジア通信：イナリとイナリティ	石渡 明	2
Northeast Asian Reports:		
Japanese Inari deity originated in the Greek Goddess Enarete?	(ISHIWATARI Akira)	2
会員の広場：幕末維新期における文雅と政治―大垣藩士小原鉄心の場合―	友田 昌宏	6
Members' Forum: The Relation Between Politics and Literary Circles in the Era Around the Meiji Restoration in Japan: in the case of OHARA Tesshin, a senior statesman of Ogaki clan.....	(TOMODA Masahiro)	6



沿岸共同体のレジリアンス： 日本を事例とした発展的研究

東北大学東北アジア研究センター准教授（日本・朝鮮半島研究分野）
デレーニ・アリーン



文化・環境人類学の研究として、私が初めて携わった日本研究は、「日本における漁業共同体」の調査であった。この研究のため私は、漁師の妻たちを対象に聞き取り調査を行い、「漁業協同組合が宮城県松島に位置する水産資源の利用権をいかにして得るに至ったか」を調べた（写真1）。漁業



写真1. 2011年10月：七ヶ浜町、
葛蒲田浜招又地区からの眺望

協同組合が資源への権利を有してはいたが、その頃は富栄養化が進行し、湾岸地域で「脱着問題」などが持ち上がった時期でもあったため調査対象とした。私はこの問題を文化的なレンズを通して考えてみた。そして、最終的に、漁業協同組合が海苔の収穫を行う漁場へアクセスしているという「社会的な絆とネットワークの事実」に焦点を当てた。海苔を養殖している下位集団に属する人々の中には、多くの家族がこの生活様式を離れた後も（1972年～1998年：84%）、このような職業に継続して従事するに至った人々がいたが、私は研究対象として、彼らの「人格的自立」の重要性にも焦点を当てた。このような世帯、特に妻が夫とともに船上で海苔を養殖している世帯にとって、「家族労働」という概念は重要なカギと考える（写真2）。

現在私が行っている研究は、ここ数年の社会・人口・政策・

環境等の変化の中にも「社会の持続可能性」と「沿岸共同体のレジリアンス」についてであるが、中でも私が重要な要素として注目しているのが、東日本大地震の津波と風評被害が地域住民の生活に与えた影響である。特に、「震災後の復興に要する高額の費用」および「漁業からの高い離職率」は、社会に大きな影響を与える原因となっている。

日本人の海産物消費は、現在でも世界最高水準の一つではあるが、その消費量は減少をたどっている。風評被害と合わさったこの減退は、海産資源の生産者が「革新」を必要としていることを意味している。かくして、私は社会の持続可能性についての研究の一貫として、これらの「革新」についても調査を始めた。例えば、直接販売、オンライン販売、新製品開発、オンラインでのプレゼンスと教育アウトリーチの開始・維持などは、そういった「革新」の例として挙げられる。

研究計画には、政策が彼らの生活様式にもたらした影響を明らかにするための「社会ネットワークと沿岸部住民の社会的“空間と場”」の調査が含まれている。最後に、今後の研究として、私はすでに欧州での使用がみられる「視覚的研究メソッド」の利用も計画している。



写真2. 2014年7月：仕事中の三世代、七ヶ浜町代ヶ崎浜

東北アジア通信

イナリとイナリティ

元東北大学 東北アジア研究センター教授

石渡 明



1. はじめに

イナリ（稲荷）神社は日本の神社の中でもかなりの割合を占め、全国至る所にあの赤い鳥居と狐の像が見られる。イナリは農業の神とされるが、製造業界、商業界、芸能界の信仰も厚く、家屋の敷地内やビルの屋上などに小さい社が祭られている場合も多い⁽⁹⁾。しかし、従来の起源説によると、イナリは朝鮮半島からの渡来人である秦氏^{はんし}が信仰した神とされ^(4, 6-9)、日本古来の神かどうか疑問視されている。伊勢は皇室、春日は藤原氏、八幡は源氏の祖神を祭るが、イナリは日本の有力氏族の祖神ではない。私の近所にも、太田道灌の娘の病氣平癒祈願に因む、世話が行き届いたイナリの小社があり（図1）、イナリの起源に興味を持って少し調べてみた。ユーラシア的な広い視野と長い目で、イナリとは何かを考えてみたい。



図1. 東京都心の道端にある手入れの行き届いた小さな稲荷神社。

2. イナリと雷

日本語では雷の電光をイナズマ、イナビカリと言う。イナズマは、「稲の天の意。稲の結実の時期に多いところから、これによって稲が実るとされた」（広辞苑）、「古代の農民の間では、稲が稲妻によって霊的なものと結合し、穂を実らせると信じられていた」（言泉）という説明がなされているが、どうもこれは農本主義者の牽強附会の匂いがする。素直に「イナ」というのは雷鳴や電光のことだと解釈した方がよいのではないか。世界の多くの民族の神話において、雷鳴や電光は神威の表現であり、専門の雷神を設けている場合もあるが、多くは最高神（ゼウス、ジュピター等）ま

たは農業神（北欧神話のトール等）が雷を司る。農業は降雨に依存するので、降雨をもたらす雷が農業神と結びつくのは自然である。つまり、イナリは元々雷神だったのではないか。稲荷の総本社たる京都の伏見稲荷も、奈良時代初期の711（和銅4）年に神が電光とともに山頂の杉の木に降臨して創始されたという。雷神なら、稲荷神社の鳥居を赤く塗り、しめ縄に稲妻形の神垂を挟む理由もわかるように思う。

広辞苑で「ズマ」を引くと、山仕事で使う柴轎^{しばり}のことだという。北欧神話のトールはヤギが引く車に乗って巨人族と戦い、その音が雷鳴だというのが、日本の山沿いに住む古代人が、雷神が柴轎に乗って天空から地上に降臨すると考え、それをイナズマと呼んだとしてもおかしくはない。長野県の諏訪神社の御柱祭でご神木がボブスレーの雪轎のように山の斜面を滑り落ちる様は、まさに落雷現象（神が降る様子）を模しているように見える。ズマは古代日本において最速の乗り物だったに違いない。

日本に「イナ」がつく地名は多く、それらの多くは稲という字が当てられているが、「伊那」、「印南」、「伊南」、「井波」、「猪名」、「引佐」、「因幡」、「渭南」、「員弁」など様々に表記され、イナリも元は伊奈利と記されていた。このことは、まず「イナ」の音があり、それに様々な字が当てられたことを示す。伊那（長野県南部）の西隣の恵那（岐阜県南東部）も、多少訛っているだけで、同じ語と思われる。これら「イナ」の地の多くは山沿いにあり、古代の雷神信仰に関係する可能性がある。

3. イナリと山岳信仰

伏見稲荷がある稲荷山は標高約230m、祭壇のように段々になった山であるが、これは地質を反映している。産総研の5万分の1地質図「京都東南部」によると、下段は第四紀の大阪層群の砂岩や礫岩^{れきがん}（図2）、その上は日本列島の骨格を構成するジュラ紀付加体（昔の秩父古生層^{ちちぶこせいそう}）の砂岩や泥岩、そして山頂部は同じ付加体のチャート（図3）からなる。チャートは火打石に使われるほど硬い岩石で侵食に強く、山頂部に突出している。このチャートは古太平洋の深さ5000mの海底に堆積した放散虫（プランクトンの一種）の珪質の殻が固まった岩石であり、約1億年間、1万km以上にわたるプレート運動で海底を移動した後、ジュラ紀の海溝のプレート沈み込み帯で日本列島に付加して隆起したものである。つまり、稲荷山のチャートは日本列島をつ

東北アジア通信

くったプレート運動の大きな力を表している。また、稲荷山の現在の地形ができたのは、西麓の桃山（・稲荷山）断層、東麓の花山・勧修寺断層の活動による。イナリは「衣食住の太祖にして万民豊楽の神霊なり」（伏見稲荷の冊子「神奈備」）とされるが、京都の稲荷山の地質は我々の衣食住の基盤たる日本の国土の成り立ちを顕現しており、この山が「稲荷信仰の源となる『祈りの山』である」（同書）。



図2. 京都の稲荷山下部の参道沿いに露出する新生代第四紀の砂礫層。ペンは長さ15cm。

「枕草子」の「うらやましげなるもの」の段（#158）に、清少納言が旧暦2月の初午の日（稲荷神社の例祭、新暦3月中頃か）に暁から稲荷詣に出かけ、稲荷山を登り始めたら昼前に暑くなり、「まことにわびしくて…涙もおちて」休んでいると、壺装束（中流以上の女が着る）ではなく、裾をたくし上げた40歳台の女が、「私は七度詣に来た。朝からもう三度詣でた。あと四度は何でもない。3時頃帰る（意識）」と会う人ごとに言いながら山道をスタスタ下って行くのを見て、「これが身にただ今ならばや」とうらやましく思ったと書いてある。平安時代にもこんな「関西の元気オバサン」がいたのは面白く、稲荷山は当時から様々な身分の女が登っ



図3. 京都の稲荷山上部の中生代ジュラ紀付加体の層状チャート。ペンは長さ15cm。

たことを示しているが、この時の印象が良くなかったのか、清少納言の神様ランキング（#287「神は」）で稲荷は最下位である。富士山、白山など日本の信仰の山の多くは女人禁制だったが（明治以後徐々に禁制が解かれた）、稲荷山は古来男女の手近な山岳信仰の場となっていた。なお、現在稲荷山の千本鳥居をくぐってお塚を巡る人々の半分以上は外国人観光客であり、レンタルの派手な和服を着た「即席日本人」も多いが、彼らはここで不思議な感動を経験するらしい。

4. 他民族のイナリ

イナリまたはそれによく似た言葉は他の民族にもある（図4）。北海道のアイヌが祭祀に用いる御幣は「イナウ（イナオ）」という。また北海道には稲穂峠など稲のつく地名が多い。アイヌは稲作民族ではなく、これらが農作物の稲に由来するとは思えない。そしてイナウの形は電光を模しているように見える。一方、日本からはるか離れた北欧フィンランドの最北部にイナリ湖とイナリ町があり、オーロラの名所として世界中から観光客が訪れる。オーロラは電光と同様に空が光る現象である。ここはトナカイを飼育しながら移動するサーミ（ラップ）人の生活領域である。フィンランド中東部のロシア国境沿いにもイナリという小さな町があり、ロシアのシベリア中央部、イルクーツク州北端部のツングース川沿いにもイナリグダという町がある。イナリはユーラシアの北方遊牧狩猟民族に共通の言葉かもしれない。

さらに、ベーリング海峡を越えてアラスカの北部にも北極海に注ぐイナル川があり、カナダ中央部サスカチュワン州最北部にエナ湖があって、これらもオーロラ帯に含まれる。また、米国テキサス州南部のヒューストン西方にもイナリという小さな集落があり（ZIP 77990、Refugio郡Tivoli町）、米国モンタナ州のカナダ国境に近いロッキー山脈にチーフ（Chief、酋長）山という岩山があって、地元民はこの山を「ニナイスタコ」と呼び、雷神の山として信仰している⁽³⁾。「ニナイ」は「イナニ」とよく似ており、日本でも「稲荷」と書くのは「イナニ」と発音する場合があったことを示す。岩手県に稲庭岳があるが、これも雷神の山かもしれない。以上、イナリとそれに類する地名はユーラシア・北米各地に散在し、オーロラが見られる場所が多いが、雷神信仰に関係する場所もあるようだ。

他方、唐代の中国に景教として伝わったネストリウス派のキリスト教（キリストの神性と人性を分けて考え、マリアを「神の母」と呼ぶことに反対）や初期のイスラム教では、イナリは「光明」を意味するとして（「景」も光り輝く意）、これらの一神教と稲荷の関連を示唆する人もいる^(4, 8)。実際、奈良時代中期の天平8（736）年には日本にも景教の僧が来朝した記録があり、秦氏一族が住んでいた太秦（の広隆寺）に拠ったと言われる。「うずまさ」は「尊く正しい」という意味の日本語だが、「大秦」は当時の中国語で「ローマ帝国」

東北アジア通信



図4 世界におけるイナリに関連した地名や信仰の分布。

(またはシリアやペルシャ)を意味し、景教を大秦教とも言う(唐代の「大秦景教流行中国碑」は末尾の人名をシリア文字で刻す)。これを若干モジって、5世紀後半に雄略天皇から賜った「禹豆麻佐」という姓に、自分たちの旧姓を含む太秦の二字を当てた秦氏には、国際感覚とユーモアと誇りと反骨心があったように思う。太秦は嵯峨嵐山の東、京都盆地西端の扇状地にあり、清少納言がここへ詣でた時に稲刈りの盛んな様子を「あはれ、をかし」と書き残している(「枕草子」#227「八月つごもり」)、当時京都の穀倉地帯だったことがわかる。太秦から見ると稲荷山は盆地の反対側、朝日が真上に輝く東山最南端の小峰である。しかし、もしイナリの起源が大秦景教にあるならば、更に遡って古代ギリシャに及ぶ可能性が出てくる。

5. ギリシャ神話のイナリ

現代ギリシャ語で enargeia という語は明解、瞭然、顕著などの意味を表す(エネルギーの語源である energie と似ているが、別の語)。例えば、enargite (硫砒銅鉱) という鉱物は規則的な割れ目(劈開)が顕著で、それがキラキラ輝くので、この語が使われている。ギリシャ神話のエナレテ(またはイナリティ Enarete)という女神は風神アイオロス(Aeolus)の妻で、この2神の間には12人ないしそれ以上の子があったという⁽¹⁾(「やは肌の」の短歌で有名な与謝野晶子も12子を産んだが1子は死産、1子は夭逝: 嵐山光三郎「文人悪食」)。この2神はギリシャ北部の古代テッサリア(アイオリス)人の祖とされる。ギリシャ神話では、アイオロスは地中海のアイオリア島(実在しない浮島、イタリアのエオリア諸島の名はこの浮島に因む)に住み、木馬の計で有名な英雄オデュッセウスがトロイ戦争(紀元前1250年頃に実在したとされ、ソクラテス、プラトン、アリ

ストテレス、アレクサンドロス大王などの時代より800年以上昔)から帰る航海の途中同島に漂着した時に、風神はその妻とともにこの英雄を歓待し、彼の求めに応じて順風を吹かせ、逆風は全て皮の袋に詰めて彼に持たせたが、故郷のイタケーの海岸を目前にして、この英雄は気が緩んで寝入ってしまい、その間に彼の部下たちが酒(一説には宝物)だと思ってこの袋を開けてしまったために、嵐が起り船はアイオリア島に吹き戻されてしまったという話が載っている^(5, 1)。風神といえども、個人の求めに応じて勝手に風を吹かせるのは御法度で、不正はゼウスに罰せられるので、後で言い訳ができるように逆風を密封して持たせる方便を考えたらしい。なお、戻ってきた英雄を、風神は冷たく追いつ返した。

しかし、イナリティについては、文句も言わずにオデュッセウスらの船団を1ヶ月にわたって夫婦で歓待したこと、12人の子を産み育てた優しい母、貞淑な妻だったということ以外はわからない。ホメロスの「オデュッセウス」はこの妻の名前すら示さないが⁽⁶⁾、アポドーロスの「ギリシャ神話」は名を明示している⁽¹⁾。風神とペアであることと、「光明」を意味する名からして、雷神だったのかもしれない。一方、現在ではエオリア(リパリ)諸島西部のチレニア海海底に、Enarete(イナリティ)という海山があり、その東隣のEolo(彼女の夫のイタリア名)海山とともに熱水活動が確認される第四紀火山なので⁽²⁾、ハワイのペレのような火山の女神だった可能性もある。エオリア諸島東部にはブルカノ島やストロンボリ島などの活火山があり、シチリア島のエトナ山やイタリア本土のベスビオ山とともにイタリア南部の活火山群をなしている。また、ギリシャにもサントリーニ(ティラ)島を含むエーゲ海の活火山群がある。ティラは紀元前1470年頃に巨大噴火を起こして直径約

東北アジア通信

10kmのカルデラを形成し、この時の噴出物と津波はミノア文明を壊滅させたという。この火山はその後も活動を続け、約70年前（1950年）にも小噴火があった。

ということで、イナリの起源はギリシャ神話の風神の妻イナリティにまで遡ることができそう。この女神と夫の風神は、紀元前1250年頃のギリシャの最有力部族テッサリア（アイオリス）人の祖とされ、当時は広く崇敬されていたに違いない。この女神は上述のように雷神または火山神だった可能性があるが、多数の子を産み育て、豊かな家庭だったとする神話の記述から、安産と豊穡の女神でもあったと考えられる。

6. イナリと狐

イナリにつきものの狐については、日本人の身近にいる動物の中で最も俊敏であることに加え、「狐火」と電光との類似等から、電光石火の雷神イナリの使徒とされたのだろう。平安時代末期の製作とされる「鳥獣戯画」では、狐が親切にも自分の尾に火を灯して蛙や兎の射の遊びのために弓的を照らしてやっている場面があり（ということは、この場面（または戯画全体）が夜の情景ということになる）、狐を発光現象と関連づける考えは中世以前からあったのだろう。狐の尾が稲穂に似ているから稲荷の使いなのだという説は、後の牽強附会のように思う。また、日本の一部の寺では、茶枳尼天（茶吉・茶耆・吒枳・拏吉・陀祇等とも書く、密教の女性の鬼神、夜叉・羅刹の類）を狐の精として祭り、一般にはこれも稲荷として信仰されるが、インドでは狐ではなくジャッカル（虎の後を追って食べ残しの死肉を漁る）だったという人もいる⁽⁸⁾。どちらもよく似た犬科の動物である。一方、フィンランドではイナリ町等で見られるオーロラを「狐の光」と呼び（小学館百科事典ニッポニカ「狐」項目）、狐とイナリの縁が日本特有ではないことを示す。稲荷神は一般に狐を従えた男神とされるが（図5）、古代のイナリ信仰は巫女を介した女神信仰だったらし



図5. 京都の伏見稲荷神社にある稲荷神像。

い^(7, 8)。稲荷神と同一視される倉稲魂大神は男神とされるが、同じく食糧の神である保食神や豊受大神は記紀でも女神とされ、安田靫彦は保食神を、おっとりした若い女性の姿で描いた。

7. おわりに

以上のように、イナリの起源を辿ると、ユーラシアと北米にまたがり、古代ギリシャにまで遡る広大な空間的・時間的広がりが見えてきて、日本の神社に祭られる神としては異質で独特な神格であることがわかる。日本を含め、イナリの地名や信仰を残す場所が、古代世界の文明の中心だったギリシャから遠隔の地ばかりであることは、柳田國男の蝸牛考の周圈論を広域化した、古い言葉や信仰の辺境残存の一例と考えられなくもない。イナリは現在の日本では極端に現世利己的な信仰の対象とされ、稲荷神社は最も日本的な観光資源の1つとされるが、実はキリスト教や仏教より昔の、古代世界共通の自然崇拜や母性崇拜の残影なのかもしれない。イナリが、目の鋭い2匹の狐を従えた老年の男神（図5）や、ジャッカルを従えて死期が近づいた人の心臓を食うというインドの鬼女（茶枳尼天）ではなく、金髪碧眼（?）、豊満多産で明るく気前のよいギリシャの女神イナリティ（エナレテ）だったと考えるのは楽しい（日本では狐が美女に化け、欧州では魔女が狐に化ける）。そして、その女神が約1500年（紀元前1100年頃～紀元後400年頃）かけてユーラシアを遍歴し、ついに渡来人とともに古代日本に來臨したと考えるのも、夢があって面白い。

文献（著者のABC順。断らない場合は初版第1刷。）

⁽¹⁾ アポロドーロス（高津春繁訳、1953）ギリシャ神話。岩波文庫 赤110-1（2017第87刷）。

⁽²⁾ Bortoluzzi, G., Ligi, M., Romagnoli, C. et al. (2010) Interactions between volcanism and tectonics in the western Aeolian sector, southern Tyrrhenian Sea. *Geophysical Journal International*, 183, 64-78. Doi: 10.1111/j.1365-246X.2010.04729.x

⁽³⁾ Davis, G.H. (2017) Tectonic klippe served the needs of cult worship, Sanctuary of Zeus, Mount Lykaion, Peloponnese, Greece. *GSA Today*, 27(12), 4-9 and cover. Doi: 10.1130/GSATG353A.1.

⁽⁴⁾ 榎本出雲・近江雅和（1994）古代は生きている 石灯笼と稲荷の謎。彩流社。286頁。

⁽⁵⁾ ホメロス（松平千秋訳、1994）オデュッセイア（上）。岩波文庫 赤102-4（2015第26刷）。

⁽⁶⁾ 加藤謙吉（2017）渡来氏族の謎。祥伝社新書。312頁。

⁽⁷⁾ 近藤喜博（1978）稲荷信仰。はなわ新書。（2006初版6刷）。247頁。

⁽⁸⁾ 松村潔（2006）日本人はなぜ狐を信仰するのか。講談社現代新書。238頁。

⁽⁹⁾ 中村直勝ほか（1976）お稲荷さん。あすなろ社。221頁。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。今回は、東北大学東北アジア研究センター助教で日本近代政治史をご専門とされております友田昌宏先生に「幕末維新期における文雅と政治—大垣藩士小原鉄心の場合—」に関しまして、ご執筆いただきました。これまで文雅の世界と政治はかけ離れた存在であるとされてきましたが、小原鉄心という人物を通じて、文雅での活躍によってネットワークが形成され、政治での成果に結びついている、ということをご紹介いただきました。

幕末維新期における文雅と政治—大垣藩士小原鉄心の場合—

東北アジア研究センター助教
(上廣歴史資料科学研究部門)

友田 昌宏



写真1. 小原鉄心
肖像写真(大垣市
立図書館所蔵)

美濃大垣藩は戸田家を藩主とする石高10万石の譜代藩である。この大垣藩だが、慶応4(1868)年正月3日の鳥羽伏見の戦いでは旧幕府方につき、新政府軍に敗れると、朝廷から「朝敵」に指定され藩主の入京を禁じられた。しかし、その後、すぐさま藩論を勤王に転換、以後、戊辰戦争においては各地の最前線で武功を挙げ、「朝敵」の汚名を返上したばかりか3万石の賞典に浴した。その間、大垣藩からは多くの人材が新政府に登用されている。大垣藩の鮮やかな転身に与って力があつたのが、城代で、新政府の参与・会計官判事を務めた小原鉄心(忠寛、1817~1872)である(写真1)。

鉄心をしてかかる働きを可能たらしめたものはなにか。この問いに答えるべく、私が注目したのは、彼の漢詩人としての側面である。本来、文雅の世界は政治の対岸に位置するものだが、そこに集う面々が政治的人格を併せ持っていれば、それはときに政治的にも影響を及ぼす。幕末のような政治の季節であればなおさらである。

鉄心は天保13(1842)年に城代に就任し、長きにわたる尽力の末、窮乏する藩財政の再建を果たした。そして、文久元(1861)年にはその功を賞され、藩から350石を賜ったが、うち250石を藩費として上納している。かかる栄をうけては民に対して顔向けできないというのである。改革では愛民をもって事にあつた鉄心であったが、それでも少なからざる犠牲が民に転嫁された。彼はそのことへの自責にとらわれていたのである。さらに、彼は自分の仕事が、部下の働きがあつてはじめてなしえたということも忘れなかった。鉄心が政治の中核にあつたおこの清廉さを保ちえたのは、俗塵を払い落とすことができる文雅の場を有していたからである。はじめて藩の役についたとき、鉄心は自邸の庭に梅を植えた。梅は文人にとって清廉潔白の象徴、彼はこの梅をもって師としたのである(写真2)。

この間、鉄心は江戸詰となり、彼の文雅の世界は藩外にまで広がった。それとともに藩政における彼の業績も全国に知れわたる。そして、文雅の世界の拡大は鉄心に政治家としての飛躍をもたらした。鉄心が江戸で親しく交わった文人に仙台藩儒の大槻磐溪(おおい)がいる。アヘン戦争に衝撃を受けた磐溪は、いち早く高島流砲術を学び、後に免許皆伝となった。この磐溪との交流が伏線となって、鉄心は、嘉永6(1853)年のペリー艦隊来航後、高島流砲術を学び、さらに、藩に軍政改革を進言して容れられると、これに邁進する。この改革の成果は、後に戊辰戦争で大垣藩が戦功を挙げる元手となった。

かくして、藩外にまで知られる存在となった鉄心は、慶応4年正月3日、明治新政府に参加として登用された。このとき彼を推したのは、前福井藩主で、当時新政府の議定であつた松平慶永である。鉄心がいつ慶永の知遇を得たのかはわからないが、その間をつないだのは、福井孝顕寺の住職 鴻雪(おうれい)だったと考えられる。鉄心は雪爪が大垣の全昌寺の住職だったとき、彼について漢詩を学んだのである。

新政府に出仕した鉄心は、鳥羽伏見の戦いの後、大垣藩の藩論を勤王に転換させるや、藩士を次々に新政府に送り込んだ。当初、その窓口となったのが、木戸孝允や広沢真臣ら長州藩出身の新政府の有力者であつた。鉄心と長州藩とのつながりは安政4(1857)年に遡る。この年、長州藩士山県半蔵(のちの男爵 山県有朋)はカラフトの視察を終え、江戸から帰藩したが、その途上、大垣に立ち寄り、女流詩人江馬細香のもとを訪ねた。このとき鉄心も席を同じくしている。鉄心が木戸と初対面したのは、慶応4年3月のことだが、以降交流の重ねるなかでたびたびこの山県のことが話題にのぼったという。文事を通じて山県の知遇を得たことは、鉄心が木戸や広沢と親交を深めるうえで大きく寄与するところがあった。

このように、鉄心を大垣に留まらぬ人物へと押し上げ、さらには大垣藩を朝敵から功藩へと飛躍させたのは、鉄心をもつ文雅のネットワークだったのである。



写真2. 小原鉄心筆「梅之図」
(大垣市奥の細道むすびの地記念館所蔵)

EDITOR'S NOTE

編集後記

今回は、日本・朝鮮半島を研究している先生方よりご寄稿を頂きました。身近な地域ではありますが、実は知らないことが多いことに気付かされました。個人的にはイナリを大変興味深く拝見しました。仙台の近くには日本三大稲荷(三大稲荷は地域により異なる)の竹駒神社もありますし、私が子供の頃はお稲荷様のお告げを信じている人もおりました。このような文化・宗教面からの調査研究も期待したいところです。(工藤 純一)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第75号 2018年6月29日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

PHONE: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/

東北大学東北アジア研究センター一気付

FAX: (022)795-7580

E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp